里親家庭の子どものピアサポート活動

山本　真知子　准教授
（人間関係学部　人間福祉学科）

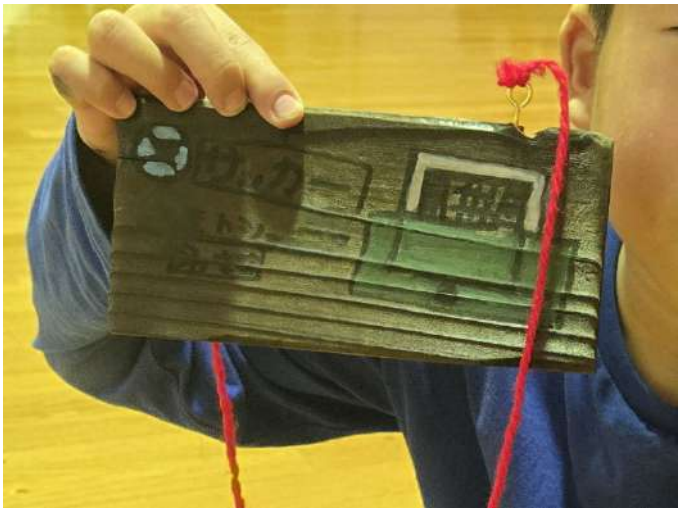
１．　プロジェクトの目的

近年、虐待などさまざまな理由で実の家庭で生活できない子どもたちを家庭で養育する里親やファミリーホームが注目されています。日本では里親やファミリーホームを増やすために様々な取り組みを行っており、里親家庭で生活する子どもも年々増加しています。本プロジェクトは、NPO 法人東京養育家庭の会の支部と東京都児童相談所、フォスタリング機関等と連携し、里親やファミリーホームの子どもたちが他の家庭の子どもや学生とのつながりを持つ「子どもスペシャル」の実施を行いました。この取り組みは子どもの権利条約の中にある子どもの意見表明権の機会の確保やセルフアドボカシー、ピアアドボカシーを行う経験に繋がり、他の里親家庭の子どもとの関係を作り、相互交流を深めることを子ども側の目的とし、学生にとっては社会的養護の理解、子どもの理解、児童相談所や児童福祉施設とのつながり、他大学生との交流等の学習機会を得ることを目的としています。

２．　プロジェクトの概要

11 月 23 日に「子どもスペシャル」を Nature Factory 東京町田にて行いました。駅から遠方であることや翌日の準備も兼ね、学生は前日から現地に宿泊しました。学生の参加は大妻女子大学人間福祉学科の山本ゼミ４年生８名、３年生８名が参加しました。その他の参加者は、里親、里子、里親家庭の元委託児童（OG/OB）、児童相談所職員、乳児院・児童養護施設の里親支援専門相談員、里親支援機関の職員、ファシリテーター、他大学の学生、総勢 100 名を超える人数でした。

子どもスペシャル当日は、幼児・小学生の子どもたち約 20 名の活動を他大学の学生とともに行いました。小学生以下の子どもたちは、大学生の学生が１人につき１人担当し、午前中は素焼きのクラフト、午後はビンゴ大会や自由遊びをしました。



小学生が学生と一緒に作成した素焼き



中高校生の親睦の様子

中高校生の子どもたちは午前中ファシリテーターやOGOBと一緒にトランプやUNOなどのカードゲームを行ったりストラップ作りをしたりしながら交流を行い、午後から中高校生は OGOB やファシリテーターとお話をする会を行いました。中高校生のお互いの現在の家庭や学校の状況や進学の際に必要な奨学金など、これからの生活のことや今抱えている気持ちをファシリテーターと共に話す時間を持ちました。



参加した学生の様子



中高校生の作成したストラップ

３．プロジェクトの成果

本プロジェクトを行うことによって、子どもたちの横のつながりができることがとても大きな成果でした。子どもたちは普段は学校も異なり、住んでいる地域も離れていることで交流することは難しいため、子ども同士が交流できる機会があることは非常に大切です。また、近年子どもの意見表明の重要性が高まり児童福祉法が改正されている中、参加した中高校生や里親家庭で育った OGOB が、「気兼ねなく自分の生い立ちや環境について話せることが良かった」などという声もあり、里親家庭で生活する子どもの支援の重要性も考えることができました。学生にとっては実際に里親家庭の子どもと接することで、それまでの机上だけの学びのイメージを変えることができ、児童相談所や児童養護施設等の社会福祉専門職との出会いから学ぶことができました。今年度も卒業生がファシリテートとして参加し、先輩と後輩のつながりを持つことができました。大学の学びだけではなくプロジェクトに参加することで学びが深まる様子もあり、社会福祉士等の実習にも発展させることができました。

４．今後に向けて

本プロジェクトに参加した学生からは「初めて里親家庭の子どもたちと１日過ごしましたが、みんな元気で楽しく過ごしていました。」、「素焼きでは火を怖がる様子もありましたが、周囲の子どもたちの様子を見て『やりたい！』と意欲的になった姿がありました。」、「里親さんのところにお昼ご飯の時などに引き渡すとき、安心した表情を見せている姿があり、里親子の関係性を学ぶことができました。」、「去年遊んだ子がとても大きくなって成長を感じるとともに、覚えていてくれたことが嬉しかったです。」といった感想が聞かれました。児童相談所や里親からも、毎年参加する本学の学生に対し、安心して任せていられるといった声も聞かれました。

この活動は地域と連携して大学にある資源等を活用することで、子どもたちとの関わりを持つことができ、お互いに学ぶことができる win-win の活動となっています。